ダチョウをもっと知ろう----ダチョウを飼育して思うこと----

Ⅴ．何故、ダチョウを死なせるのか？（その１）

帯広畜産大学　名誉教授
農学博士　　三好俊三

広大な土地に何百羽、何千羽と月齢や年齢の異なるダチョウを分けて飼育している大規模農場では数羽のダチョウが死亡することなど問題にならないかも知れません（病気でないことが前提になります）。しかし、十数羽から 50 羽そこそこのダチョウを飼育している農家、特に、年齢の異なる群では、多くて 10～20 羽ほどしか飼育していない状況では、1～2 羽のダチョウを死なせることが許されないことになると思います。しかし、どのような規模であれ、自分の農場を振り返ってみてください。何らかの原因で数羽のダチョウを死なせているのが現状ではないでしょうか、私のところでは、6ヶ月齢から 5 歳齢までの鳥を 30 羽ほど飼育したことがあります。6ヶ月齢を過ぎると、通常の飼育方法であれば死亡されることがないといわれます。しかし、実験で死亡させた以外にも多くの鳥を死なせています。その原因を探ってみますと、多くは、人が与えた飼育環境から来るダチョウへの“ストレス”が発端となっているようです。

さて、意外と気楽に用いている“ストレス”とは何でしょうか？私は医者でも心理学者でもありませんので、”ストレス”を科学的に定義することなどできません。そこで、一般的に私達が病気でもないのに体調が少しおかしく、食欲もあまりなく、眠れないとか、おなかが痛くなるとかすれば“ストレス”が原因ではないかと言います。さらに、その“ストレス”が続けば本当の病気になってしまいます。この程度の認識で“ストレス”の意味をとらえ、私達のところで死なせてしまったダチョウのことを述べることとします。

私は 2002 年から大学で学生達とサークルを作ってダチョウを飼育してきました。当初は、3ヶ月齢を過ぎたダチョウを導入していましたので、粗飼料を多くした飼育方法であってもそれほど問題なく育成できてきました。その後、ヒナから飼育するようになり、本当に思わぬことでダチョウを死なせています。やはり育成が難しいと言われる 3ヶ月齢までのダチョウを多く死なせています。最も残念で印象的なことは 1ヶ月過ぎに順調に成長していた 2 羽のヒナを同時に死なせてしまったことです。ニワトリ用の大きい孵卵器をダチョウ用に改良し、私が初めて孵化に成功し、育てたヒナでした。マニュアルを少し改良し、ビニールハウス内で順調に成育していました。1ヶ月齢を過ぎたある天気のいい日にハウス内と育雛箱等を洗浄・消毒するためヒナをハウス外の芝生の上に作った囲いに出してやりました。私達にとっては、汚れたハウス内より外の芝生の上は非常に良い環境に思えました。しかし、2 羽のヒナにとってはあまりにも広すぎたの

かもしれません。学生達が餌で誘うようにしてから、ヒナも走りまわるようになりました。学生がヒナが喜んでいると思い、私が作業している間、ヒナと遊んでいたようです。2 日後、急に餌を食べなくなり、座り込むようになり、3 日後に 2 羽とも死んでしまいました。解剖してみますと、筋胃に小石や草がぎっしり詰まって、小腸に何も送られていない状態、いわゆる“食滞”を起こしていました。広い所に出し、追いかけるような行為は、ヒナにとって計り知れないストレスとなり、結果として食滞を起こし、死に至ったものと思います。

皆さんもご存知のように 3 ヶ月齢頃までのヒナは、外からのストレスに非常に弱く、些細なことにも強く反応し、急激に食欲をなくし、死に至ります。そのストレスのほとんどは人的なもので、飼育者の不注意がヒナを死に追いやっていると思われます。その一例を示してみます。介助もなく孵化し、餌付けも終わり、元気に育雛パドック内を歩き回り、順調に育っていた 2 週齢程の 3 羽のヒナの話です。ヒナの世話は、サークルの上級生数名が担当していました。新入生をサークルに勧誘するため、数名ずつ何回かに分けて見学させました。延べ時間で 1 時間ほどだったかと思います。見学者は大きな声で話をしますし、フラッシュをつけて写真まで撮らせたようです。その日の夕方からヒナの活力が無くなってきている感じを受けました。その後、2～3 日の間に次々と死んでいきました。やはり筋胃に食滞を起こしており、小腸には、何も入っていない状態でした。小さいヒナを学生が上から見て、騒がしくすれば、ヒナにとってどれほどの恐怖(ストレス)があったことでしょうか。どの動物も小さい頃は本当にかわいいものです。しかし、その動物に接するときには細心の注意が必要です。6 ヶ月齢にもなれば見学者に対してたやすく順応するようになるかも知れませんが、3～4 ヶ月齢までの鳥は、人からのストレスを強く受けるように思われます。私の所では、各月齢のダチョウの背の高さに合わせて座るようにし、少人数で見学してもらっています（中腰で見学してもらうと余計なおしゃべりも少なくなります)。他のストレスの要因もありますが、その根源は飼育者や見学者など人の不用意な行動や不注意にあると思っています。

この時期の他の事例を示します。特別な介助もなく 5 羽を孵化しました。順調に育ち、1 ヶ月齢で幼雛舎から育成用のパドックに移動しました。エサは床からではなく、餌箱から食べるようになっていました。移動後、1 週間ほどして 5 羽の大きさにバラツキが生じてきました。よく観察してみますと、大きい 1 羽が給餌の時に小さい 2 羽の目をつついて追いやっています。数ヶ所に餌箱と給水器を置いているのですが、全羽が 1 ヶ所から食べようとします。他の餌箱から食べようとしませんので、弱い 2 羽はエサと水が十分に取れなかったと思われます。2 羽を別飼いにしましたが、1 羽はすでに食い込みも悪く、体重も増えずに死んでしまいました。消化管にはほとんど何も入っておらず、消化管の機能が低下していたものと思われます。他の 1 羽は回復しても増体もしましたが、1 年齢になっても他の鳥の 1/2～1/3 ほどの体重しかありません。ダチョウは 1～3 ヶ月齢までの成長の遅れを後になって取り返すことが出来ません。それ故に、この時期

に消化管の機能を十分に発達させておくこと必要があります。残りの３羽の中で、また、“つつき”が出ましたが、一番強い鳥を別飼いにすることによってどの鳥も順調に成育しました。こんなに早くからでもダチョウ間に強弱が出るものです。“つつき”と言う悪癖が何故出てくるのか分かりませんが、こんなにも早く出現することの根本には、飼育者のヒナの取り扱いにあるのではと思います。ともあれ、弱いダチョウへのストレスはかなり大きいものと思われます。日頃からダチョウをよく観察し、余計なストレスをかけないように細心の注意を払ってください。

こんな隙間に首を挟んでしまいました。

こんな扉の下の隙間にも首を挟むことがあります

人の不用意な行動がダチョウに思わぬ大きなストレスを与えてしまいますが、個々のダチョウによってストレスの受け方が異なるようです。特に群内に社会性（強い鳥、弱い鳥がいる）が明らかな群では。個体ごとに外部からの刺激に対する反応の度合いが顕

著に異なります。例えば大きい音などにある 1 羽が驚いたとき、すぐに群全体がパニック状態になり、パドック内を走り回ります。さらに驚くことが続けば、強い鳥の興奮が収まらず、弱い鳥にまるで八つ当たりのように攻撃をします。飼育しているパドックの大きさにもよりますが、この一連のパニック状態が何度も繰り返されるようであれば、弱いダチョウを死なせることが多くなります。2～3 年齢のダチョウで起こった事例を示します。隣接する牧場で作業をしていた大型のトラクターの音に驚き、数ヶ所のパドックでパニック状態になってしまいました。あるパドックの弱いダチョウがパドックの隅においやられ、威嚇され蹴られる状態になりました。何とか攻撃から逃れようとした際に、扉とフェンスの隙間(約 5cm)に首を挟み込みました。頭を持ち上げれば簡単に外れるのですが、暴れましたので延髄が切れたのでしょう“首吊り”のように即死でした。隙間に下から首を挟み、死んだ鳥もいます。弱い鳥は、常に攻撃にさらされています。逃げ迷う時、フェンスの鉄管を固定しているクランプのネジに首や胸の皮膚を引っかけって大怪我することもあります。出血すればそこをまた攻撃され、エサも満足に食べられず、厳冬期には衰弱が急激に起こり死なせてしまいます。世話をしている学生にダチョウの観察の仕方を教えているのですが、連絡を受けたときにはほとんど手遅れの状態です。これらの事例も人の不注意から来たものと思っています。トラクターの作業をやめてもらえませんが、扉とフェンスとの隙間に首を挟まない工夫をしておくこと（写真のようにテープを張る）やクランプにはカバーを付け固定することを早めにしておけば、ダチョウを死なせなかったでしょう。

ここまでの事例はどこで飼育していても生じることでしょ。厳冬期の気温が－20℃をかるく下回る日が何日もあるここ帯広ならではの事例の紹介は次の機会にします。死には至りませんでしたが、よく回復したと思われる怪我を負わせた事例も多くあります。その原因を突き詰めれば飼育者の不注意によると言っても過言ではないでしょう。“こんなことになってしまった”と後悔しないようにダチョウにかかる“ストレス”を排除し、ダチョウの状態をよく観察しておかねば、何かが生じた場合の損失も大きくなります。

ダチョウ産業の発展にはいろいろな方々にダチョウを見て頂きたいのですが、農場への見学者の出入りには、十分注意してください。病気の予防も大切ですが、ダチョウに思わぬストレスがかかっていることがあります。あえて言いますと“お母さんたちの余計なおしゃべり”や“子供たちがかん高い声で走り回る”ことは厳重に注意してください。